

変患者の病態進行の早期発見に有用な可能性がある。

8. 院内がん登録データを利用したコロナ禍におけるがん患者受診状況の分析

がん診療連携課がん登録係

安東 正子 春井 直子
井上 豊子

2020年症例の院内がん登録件数は2,506件、2019年と比べ82件の減少となった。

コロナ禍において、がん患者の受診状況に変化が起きているのかを統計分析した結果を報告する。

整形外科部長より、骨転移での受診者が2020年に入り急増したため、前年と比較した統計の依頼があった。臨床病期で骨転移のあった件数は、2019年50件、2020年79件と増加していた。そこで、がんと診断時、すでにstage IVの患者が増加したと推測、2019年414件17.3%、2020年432件19.1%（脳腫瘍、白血病、その他の造血器腫瘍を除く）であったが、診断のみで精査せず、積極的治療なしとして他院へ紹介した件数が、2019年と2020年で2倍増となったことがわかった。

当院は、感染症病床で中等症患者を受け入れながら、コロナ禍であっても平時のごとく診療を実施する方針を貫いてきたため、がん患者数は大きく減少しなかったと考える。

引き続き、2021年の統計についても、がん治療に影響を及ぼす結果となるのか院内がん登録を実施しながら統計分析を試みたい。

9. 当院における COVID-19妊婦への対応

産婦人科

大前 彩乃 小高 晃嗣
西田 康平 相本 法慧
平田 智子 西條 昌之
西田 友美 河合 清日
中山 朋子 関 典子
水谷 靖司

2019年後半からSARS-CoV-2と名付けられた新型コロナウイルスが世界中に広がり、COVID-19パンデミックを引き起こした。周産期領域でもその影響は多大にあり、当院での自験例を交えて報告する。当院では2020年7月から2021年11月までの間に39名のCOVID-19妊婦の入院受け入れを行った。そのうち治療を要したものは19名、陽性期間中に出産となったものは15名であった。出産15名のうち帝王切開は14例で、その要因としては前期破水や骨盤位などの産科的適応が3例、COVID-19肺炎による母体状態増悪が3例、無症状だが二次感染回避のため施行したものが8例であった。当院でのCOVID-19妊婦への対応策については、関連各科医師、助産師、看護師など多職種によるカンファレンスを経て方針決定を行っている。現在、妊婦も含めた一般の方のワクチン接種普及も進んできてはいるものの、今後第6波の襲来も予測されるため引き続きの感染対策は必須であり、対応策の見直し等は必要だと思われる。

10. 帝王切開後に感染性心内膜炎による急性心不全を合併した一症例

循環器内科

山田 智史 藤尾 栄起
西村 侑太 松本 晶子
飛田 諭志 寺西 仁
幡中 邦彦 向原 直木

心臓血管外科

金光 仁志 毛利 亮

【主訴】

呼吸困難

【現病歴】

30代女性。前期破水と絨毛膜羊膜炎疑いのため当院産婦人科に母体搬送され、入院2日目に緊急帝王切開施行した。術後SpO2低下、胸部レントゲンにて両肺野の透過性低下、労作時呼吸困難を認めたため当科に紹介となった。

【臨床経過】

ベッドサイドでの経胸壁心臓超音波検査で

は、僧帽弁逸脱に伴う重症僧帽弁逆流を確認した。血液培養を施行したところ、2セットから緑色レンサ球菌が陽性となり、抗菌薬はABPC/SBTからABPCに変更した。入院10日目より心房頻拍発作を認めるようになり心不全が代償できなくなったため、入院14日目に人工弁置換術を行った。

【考察】

周産期の感染性心内膜炎の報告は少なく、母児双方の生命を脅かす疾患である。

【結語】

帝王切開後にStreptococcus vestibularisによる感染性心内膜炎と僧帽弁閉鎖不全症を指摘され僧帽弁置換術を行った一例を経験したので報告する。

11. 当院形成外科における他科からの手術依頼 —形成外科って他に何してるの？

形成外科

大森 凜 高田 温行
最所 裕司 作道 善行

形成外科は再建外科でもあり外科系他科との合同手術で再建を担当している。また、内科からのリンパ節生検や麻酔科等のデバイス抜去や留置のアシストなど他科をまたいだ手術を行っている。今回、2021年の他科との合同手術や手術依頼の症例数とその代表例を報告する。

12. COVID-19陽性妊産褥婦への出産体験の受容や愛着形成に向けた精神的支援

伊勢田真子 魚谷 彩子
村尾 由花 藤川 優紀
齋藤 知子

当院は、総合周産期母子医療センターであり、第二種感染症指定病院であるため、播磨姫路医療圏を中心に兵庫県内のCOVID-19陽性妊産婦の受け入れを行った。COVID-19陽性妊産婦の治療は、母児双方への影響を考慮した上で方針を決定する必要がある。妊娠中は使用できる薬剤や治療に制限があるため、肺炎症状が増悪

すると突然の分娩を選択せざるを得ない場合がある。

2021年12月までに40名のCOVID-19陽性妊婦を受け入れ、その内13名が帝王切開術、1名が経膈分娩で出産された。出産に対して肯定的に捉える褥婦もいたが、否定的な思いをぶつける褥婦もいた。否定的に捉えた要因は、十分に心構えができていない時期に予期せぬ出産となったことが考えられる。今回、精神的に不安定になった褥婦の症例を通して、出産体験の受容や愛着形成に向けた関わりを考察した。どのような状況であっても安心して子育てできるような医療と看護の提供、地域との更なる連携強化に向け取り組んだ経過を報告する。

13. 当院における骨盤内臓全摘の検討

泌尿器科

森田 祥平 北村 聡
中山慎太郎 田中 幹人
西川 昌友 原口 貴裕

【発表要旨】

骨盤内悪性腫瘍（直腸癌、卵巣癌、子宮癌など）の中には、腫瘍が増大し、他臓器への浸潤が認められるにもかかわらず、遠隔臓器への転移を認めないものがある。このような骨盤内悪性腫瘍に対し、当院でも骨盤内に関わる診療科が合同で骨盤内臓全摘術を施行しているが、本術式では病期の進んだ症例が適応となるため、手術の難易度が高い、手術時間が長い、出血量が多いなど患者にとっても医療者側にとっても負担が大きい。また人工肛門造設に加え尿路変更を行い、double stomaとなる可能性も高く、患者のQOLに影響を与えることは避けられない。しかしながら本手術で予後を大きく改善できるという報告も多数あり、今回2017年から現在までに経験した10例に対して合併症や再発の有無などについて考察を行った。